白村江（はくすきのえ）の戦いから壬申の乱まで

藤田秀憲

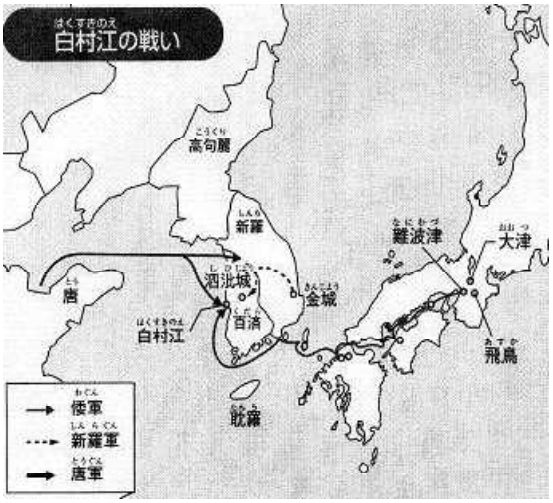
660年7月18日、新羅（金春秋-武烈王）5万と唐（高宗）水陸13万の連合軍に攻め込まれ、百済（義慈王）は滅亡した。

3カ月後、百済の遺臣鬼室福信は百済再興のため、大和朝廷に援軍の派遣と人質の百済の皇子（余豊璋）の送還を要請してきた。

「百済を助けることは、新羅と戦うだけでなく強大な唐を敵に回すことになる。 このまま百済を見捨てた場合、多年日本が勢力を伸ばそうとしていた朝鮮半島を全く失うことになるばかりか、百済が滅べば危険は次に日本に及ぶかもしれない。」 朝議は沸騰したと思われるが、ついに百済救援に決し、駿河の国で軍船を造らせた。

12月24日、斉明天皇は難波宮に行き、みずから筑紫に出向いて救援軍を派遣することを表明した。

661年(斉明7年)1月6日、68歳の斉明天皇を乗せた軍船（170艘・安曇比羅夫大将軍）は難波の海から征西の途にのぼった。中大兄、大海人両皇子および妃達もこれに同行した。



1月8日、吉備大伯海（おおくのうみ―岡山県邑久郡）。

1月14日、道後温泉に近い伊予国熟田津の石湯行宮(いはゆのかりみや)に泊まり、長期滞在。

この時の額田王の歌に ＜熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな（万1-8）＞がある。

3月25日、那大津（福岡県博多）に到着。磐瀬行宮（いわせのかりみや）（福岡市南区三宅）に入る。

5月9日、朝倉宮（福岡県朝倉郡朝倉町―博多湾から約40Km内陸部）に入る。

7月24日、斉明天皇（68歳）急死。 中大兄皇子は皇太子として喪に服しながら、称制して、長津宮で戦の指揮をとり、9月、豊璋に倭国最高位の「職冠」を授け、5千人の兵をつけ、福信のもとへ送った。

662年、百済に帰国した豊璋は百済王となり、福信と協力して戦いを有利に進めた。しかしだんだん二人の間が不和になって、豊璋は謀反の罪で福信を殺害した。

663年3月、中大兄皇子は百済に2万7千人の兵を3軍編成で送り、＜前将軍　上毛野君稚子（かみつけのきみわかこ）、中将軍　巨勢神前臣訳語（こせのかんざきのおみおさ）、後将軍　阿部引田臣比羅夫（あべのひきたのおみひらふ）＞ 援軍は博多湾から壱岐、対馬を超え朝鮮半島へ向かった。

663年8月、唐・新羅軍が百済復興軍の周留（する）城を包囲し、唐軍は軍船170艘を白村江（錦江～クムガン河口）に配備した。

倭国軍が朝鮮半島西岸に到着。百済王豊璋と倭国軍は、「我ら先を争わば、彼自ずからにに退くべし」と突撃作戦に出た。

8月28日、白村江で唐軍と百済・倭国軍が激突。倭国軍は唐の水軍によって挟み撃ちにされ、軍船400艘が燃え上がり大敗した。百済王豊璋は高句麗へ逃亡し、9月7日、百済が陥落し永久に滅亡した。

唐・新羅連合軍に大敗した倭国軍は、亡命を希望する百済人を伴って帰国。 唐・新羅軍の侵攻に備え、対馬、壱岐、筑紫の国に防人と烽火台を置き、大宰府に水城（みずき）を築き、瀬戸内海を主とする西日本各地に古代山城などの防衛砦を築いた。 さらに667年に天智天皇は大津宮（大津市錦織町）に遷都、翌年即位し、律令の編纂と中央集権体制の整備を目指した。

天智天皇が崩御すると、672年に古代最大の内戦「壬申の乱」が勃発し、これに勝利した大海人皇子は、飛鳥浄御原宮で即位し（天武天皇）、専制的な統治体制を構築してゆき、新たな国家建設を進めた。

＜朝鮮半島周辺のその後＞

唐・新羅は668年に高句麗を滅ぼした後、 一時対立するが、唐の冊封を受けた新羅によって、676年朝鮮半島が統一された。また698年、朝鮮半島東北部に高句麗の遺民、大祚栄によって渤海が建国された。